

高瀬舟

森鷗外

青空文庫

高瀬舟たかせぶねは京都の高瀬川たかせがわを上下じょうげする小舟である。徳川時代に京都の罪人が遠島えんとうを申し渡されると、本人の親類が牢屋敷ろうやしきへ呼び出されて、そこで暇乞いとまごいをするのを許された。それから罪人は高瀬舟に載せられて、大阪おおさかへ回されることであつた。それを護送するのは、京都町奉行まちぶぎようの配下はいかにいる同心どうしんで、この同心は罪人の親類の中で、おも立つた一人にんを大阪まで同船させることを許す慣例であつた。これは上へ通つた事ではないが、いわゆる大目に見るのであつた、黙許もくじょであつた。

当時遠島を申し渡された罪人は、もちろん重い科とがを犯したものと認められた人ではあるが、決して盗みをするために、人を殺し火を放つたというような、獰悪じょうあくな人物が多数を占めていたわけではない。高瀬舟に乗る罪人の過半は、いわゆる心得違いのために、思わぬ科を犯した人であつた。有りふれた例をあげてみれば、当時相対死あいたいしと言つた情死をはかつて、相手の女を殺して、自分だけ生き残つた男というような類たぐいである。

そういう罪人を載せて、入相いりあいの鐘の鳴るころにこぎ出された高瀬舟は、黒ずんだ京都の町の家々を両岸に見つつ、東へ走つて、加茂川かもがわを横ぎつて下るのであつた。この舟の中で、罪人とその親類の者とは夜どおし身の上を語り合う。いつもいつも悔やんでも返らぬ

繰り言である。護送の役をする同心は、そばでそれを聞いて、罪人を出した親戚眷族の悲惨な境遇を細かに知ることができた。所詮町奉行の白州で、表向きの口供を聞いたり、役所の机の上で、口書を読んだりする役人の夢にもうかがうことのできぬ境遇である。

同心を勤める人にも、いろいろの性質があるから、この時ただうるさいと思って、耳をおおいたく思う冷淡な同心があるかと思えば、またしみじみと人の哀れを身に引き受けて、役がらゆえ気色には見せぬながら、無言のうちにひそかに胸を痛める同心もあつた。場合によつて非常に悲惨な境遇に陥つた罪人とその親類とを、特に心弱い、涙もろい同心が宰領してゆくことになる、その同心は不覚の涙を禁じ得ぬのであつた。

そこで高瀬舟の護送は、町奉行所の同心仲間て不快な職務としてきらわれていた。

いつのころであつたか。たぶん江戸で白河楽翁侯が政柄を執っていた寛政のころでもあつただろう。智恩院の桜が入相の鐘に散る春の夕べに、これまで類のない、珍しい罪人が高瀬舟に載せられた。

それは名を喜助と言つて、三十歳ばかりになる、住所不定の男である。もとより牢

屋敷うやしきに呼び出されるような親類はないので、舟にもただ一人ひとりで乗った。

護送を命ぜられて、いっしょに舟に乗り込んだ同心はねだしようべえ羽田庄兵衛はねだし庄兵衛は、ただ喜助が弟殺し

の罪人だということだけを聞いていた。さて牢屋敷から棧橋さんばしまで連れて来る間、この瘦や肉せじしの、色の青白い喜助の様子を見るに、いかにも神妙しんびように、いかにもおとなしく、自

分をば公儀の役人として敬って、何事につけても逆らわぬようにしている。しかもそれが、罪人の間に往々見受けるような、温順を装って権勢ごんせいに媚こびる態度ではない。

庄兵衛は不思議に思った。そして舟に乗ってから、単に役目の表で見張っているばかりでなく、絶えず喜助の挙動に、細かい注意をしていた。

その日は暮れ方から風がやんで、空一面をおおった薄い雲が、月の輪郭をかすませ、ようよう近寄って来る夏の温かさあたたかが、両岸の土からも、川床かわどこの土からも、もやになって立ちのぼるかと思われる夜よであった。下しもぎよう京の町を離れて、加茂川を横ぎったところからは、あたりがひっそりとして、ただ舳へさきにさかれる水のささやきを聞くのみである。

夜舟よふねで寝ることは、罪人にも許されているのに、喜助は横になろうともせず、雲の濃淡に従って、光の増したり減じたりする月を仰いで、黙っている。その額は晴れやかで目にはかすかなかがやきがある。

庄兵衛はまともには見ていぬが、始終喜助の顔から目を離さずにいる。そして不思議だ、不思議だと、心の内で繰り返している。それは喜助の顔が縦から見ても、横から見ても、いかにも楽しそうで、もし役人に対する気がなかつたなら、口笛を吹きはじめるとか、鼻歌を歌い出すとかしように思われたからである。

庄兵衛は心の内に思った。これまでこの高瀬舟の宰領をしたことは幾たびだか知れない。しかし載せてゆく罪人は、いつもほとんど同じように、目も当てられぬ気の毒な様子をしてきた。それにこの男はどうしたのだろう。遊山船ゆざんぶねにでも乗つたような顔をしている。罪は弟を殺したのだそうだが、よしやその弟が悪いやつで、それをどんなゆきがかりになつて殺したにせよ、人の情じょうとしていい心持ちはせぬはずである。この色の青いやせ男が、その人の情というものが全く欠けているほどの、世にもまれな悪人であろうか。どうもそうは思われない。ひよつと気でも狂っているのではあるまいか。いやいや。それにしては何一つつじつまの合わぬことばや挙動がない。この男はどうしたのだろう。庄兵衛がためには喜助の態度が考えれば考えるほどわからなくなるのである。

しばらくして、庄兵衛はこらえ切れなくなつて呼びかけた。「喜助。お前何を思ってい

るのか。」

「はい」と言つてあたりを見回した喜助は、何事をお役人に見とがめられたのではないかと気づかうらしく、居ずまいを直して庄兵衛の気色けしきを伺つた。

庄兵衛は自分が突然問いを発した動機を明かして、役目を離れた応対を求める言いわけをしなくてはならぬように感じた。そこでこう言つた。「いや。別にわけがあつて聞いたのではない。実はな、おれはさつきからお前の島へゆく心持ちが聞いてみたかつたのだ。おれはこれまでこの舟でおおぜいの人を島へ送つた。それはずいぶんいろいろな身の上の人だったが、どれもこれも島へゆくのを悲しがつて、見送りに来て、いっしょに舟に乗る親類のものと、夜どおし泣くにきまつていた。それにお前の様子を見れば、どうも島へゆくのを苦にしてはいないようだ。いったいお前はどう思っているのだい。」

喜助はにっこり笑つた。「御親切におつしやつてくださつて、ありがとうございます。なるほど島へゆくということは、ほかの人には悲しい事でございます。その心持ちはわたくしにも思いやつてみるができます。しかしそれは世間でらくをしていた人だからでございます。京都は結構な土地ではございますが、その結構な土地で、これまでわたくしのいたして参つたような苦しみは、どこへ参つてもなからうと存じます。お上かみのお慈

悲で、命を助けて島へやってくださいます。島はよしやつらい所でも、鬼のすむ所ではございますまい。わたくしはこれまで、どこといって自分のいい所というものがございませんでした。こん度お上かみで島にいろとおっしゃってくださいます。そのいろとおっしゃる所に落ち着いていることができますのが、まず何よりもありがたい事でございます。それにわたくしはこんなにかよわいからだではございますが、ついぞ病気をいたしたことはございせんから、島へ行つてから、どんなつらい仕事をしたって、からだを痛めるようなことはあるまいと存じます。それからこん度島へおやりくださるにつきまして、二百文もんの鳥ちようもく目をいただきました。それをここに持つております。」こう言いかけて、喜助は胸に手を当てた。遠島を仰せつけられるものには、鳥目二百銅をつかわすというのは、当時の掟おきてであつた。

喜助はことばをついだ。「お恥かしい事を申し上げなくてはなりません、わたくしは今日こんにちまで二百文というお足あしを、こうしてふところに入れて持つていたことはございませぬ。どこかで仕事に取りつきたいと思つて、仕事を尋ねて歩きまして、それが見つかり次第、骨を惜しまずに働きました。そしてもらったぜに銭は、いつも右から左へ人手に渡さなくてはなりません。それも現金で物が買つて食べられる時は、わたくしの工面くめんのいい

時で、たいていは借りたものを返して、またあとを借りたのでございます。それがお牢ろうにはいつてからは、仕事をせずに食べさせていただきます。わたくしはそればかりでも、お上かみに対して済まない事をいたしているようになりませぬ。それにお牢ろうを出る時に、この二百文をいただきましたのでございます。こうして相変わらずお上の物かみを食べていて見ますれば、この二百文もんはわたくしが使わずに持つていることができません。お足を自分の物にして持つているということは、わたくしにとつては、これが始めでございませぬ。島へ行つてみますまでは、どんな仕事ができるかわかりませんが、わたくしはこの二百文を島でする仕事のもして本手にしようと思つております。」こう言つて、喜助は口をつぐんだ。

庄兵衛は「うん、そうかい」とは言つたが、聞く事ごとあまり意表に出たので、これもしばらく何も言うことができずに、考え込んで黙つていた。

庄兵衛はかれこれ初老に手の届く年になつていて、もう女房に子供を四人生ませている。それに老母が生きていたので、家は七人暮らしである。平生人には吝りんしよく嗇しやくと言われるほどの、儉約な生活をしていて、衣類は自分が役目のために着るもののほか、寝巻しかしらえぬくらいにしている。しかし不幸な事には、妻をいい身代しんだいの商人の家から迎えた。そこで女房は夫のもらう扶持米ふちまいで暮らしを立ててゆこうとする善意はあるが、ゆたかな家

にかわいがられて育つた癖があるので、夫が満足するほど手元を引き締めて暮らしてゆることができない。ややもすれば月末になって勘定が足りなくなる。すると女房が内証で里から金を持って来て帳尻を合わせる。それは夫が借財というものを毛虫のようにきらうからである。そういう事は所詮夫に知れずにはいない。庄兵衛は五節句だと言つては、里方から物ももらい、子供の七五三の祝いだと言つては、里方から子供に衣類をもらうのでさえ、心苦しく思っているのだから、暮らしの穴をうめてもらったのに気がついては、いい顔はしない。格別平和を破るような事のない羽田の家に、おりおり波風の起こるのは、これが原因である。

庄兵衛は今喜助の話聞いて、喜助の身の上をわが身の上に取り比べてみた。喜助は仕事をし給料を取つても、右から左へ人手に渡してなくしてしまふと言つた。いかにも哀れな、気の毒な境界である。しかし一転してわが身の上を顧みれば、彼と我れとの間に、はたしてどれほどの差があるか。自分も上からもらう扶持米を、右から左へ人手に渡して暮らしているに過ぎぬではないか。彼と我れとの相違は、いわば十露盤の桁が違つていだけで、喜助のありがたがる二百文に相当する貯蓄だに、こつちはないのである。

さて桁を違えて考えてみれば、鳥目二百文をでも、喜助がそれを貯蓄と見て喜んで

いるのに無理はない。その心持ちはこつちから察してやることができる。しかしいかに桁を違えて考えてみても、不思議なのは喜助の欲のないこと、足ることを知っていることである。

喜助は世間で仕事を見つけるのに苦しんだ。それを見つけさえすれば、骨を惜しまずに働いて、ようよう口を糊のりすることのできるだけで満足した。そこで牢ろうに入ってから、今まで得がたかつた食が、ほとんど天から授けられるように、働かずに得られるのに驚いて、生まれてから知らぬ満足を覚えたのである。

庄兵衛はいかに桁けたを違えて考えてみても、ここに彼と我れとの間に、大いなる懸隔けんかくのあることを知った。自分の扶持米ふちまいで立ててゆく暮らしは、おりおり足らぬことがあるにしても、たいてい出納すいとうが合っている。手いっぱいすいの生活である。しかるにそこに満足を覚えたことはほとんどない。常は幸いとも不幸とも感ぜずに過すごしている。しかし心の奥には、こうして暮らしていて、ふいとお役が御免になつたらどうしよう、大病にでもなつたらどうしようという疑懼ぎくが潜ひそんでいて、おりおり妻が里方から金を取り出して来て穴うめをしたことなどがわかると、この疑懼ぎくが意識しきいの闕あの上に頭をもたげて来るのである。

いったいこの懸隔けんかくはどうして生じて来るだろう。ただ上うわべだけを見て、それは喜助には

身に係累がないのに、こつちにはあるからだと言つてしまえばそれまでである。しかしそれはうそである。よしや自分が一人者ひとりものであつたとしても、どうも喜助のような心持ちにはなられそうにない。この根底はもつと深いところにあるようだ、庄兵衛は思つた。

庄兵衛はただ漠然ぼくぜんと、人の一生というような事を思つてみた。人は身に病があると、この病がなかつたらと思う。その日その日の食がないと、食つてゆかれたらと思う。万一の時に備えるたくわえがないと、少しでもたくわえがあつたらと思う。たくわえがあつても、またそのたくわえがもつと多かつたらと思う。かくのごとくに先から先へと考へてみれば、人はどこまで行つて踏み止まることができるものやらわからない。それを今日の前で踏み止まつて見せてくれるのがこの喜助だと、庄兵衛は気がついた。

庄兵衛は今さらのように驚異の目をみはつて喜助を見た。この時庄兵衛は空を仰いでいる喜助の頭から毫光ごうこうがさすように思つた。

庄兵衛は喜助の顔をまもりつつまた、「喜助さん」と呼びかけた。今度は「さん」と言つたが、これは充分の意識をもつて称呼を改めたわけではない。その声わが口から出てわが耳に入るや否や、庄兵衛はこの称呼の不穩当なのに気がついたが、今さらすでに出た

ことばを取り返すこともできなかつた。

「はい」と答えた喜助も、「さん」と呼ばれたのを不審に思うらしく、おそるおそる庄兵衛の気色けしきをうかがつた。

庄兵衛は少し間まの悪いのをこらえて言った。「いろいろの事を聞くようだが、お前が今度島へやられるのは、人をあやめたからだという事だ。おれについてにそのわけを話して聞せてくれぬか。」

喜助はひどく恐れ入つた様子で、「かしこまりました」と言つて、小声で話し出した。「どうも飛んだ心得違いで、恐ろしい事をいたしました、なんとも申し上げようがございませぬ。あとで思つてみますと、どうしてあんな事ができたかと、自分ながら不思議でありません。全く夢中でいたしましたのでございます。わたくしは小さい時にふたおや二親しんが時疫しえきでなくなりまして、弟ふたりと二人あとに残りました。初めはちようど軒下に生まれた犬の子にふびんを掛けるように町内の人たちがお惠民くださいますので、近所じゆうの走り使いなどをいたして、飢え凍えもせず、育ちました。次第に大きくなりまして職を捜しますにも、なるたけ二人が離れないようにいたして、いっしょにいて、助け合つて働きました。去年の秋の事でございます。わたくしは弟といっしょに、西陣にしじんの織場おりばにはいりまして、

空引きそらびということをしたすことになりました。そのうち弟が病気で働けなくなつたのでございませう。そのころわたくしどもは北山きたやまの掘立小屋ほったてこや同様の所に寝起きをいたして、紙かみや屋川がわの橋を渡つて織場かよへ通つておりましたが、わたくしが暮れてから、食べ物などを買つて帰ると、弟は待ち受けていて、わたくしを一人ひとりでかせがせてはすまないすまないと申しておりました。ある日いつものように何心なく帰つて見ますと、弟はふとんの上に突つ伏ふしてしまして、周囲まわりは血だらけなのでございませう。わたくしはびっくりいたして、手に持つていた竹の皮包みや何かを、そこへおつぽり出して、そばへ行つて『どうしたどうした』と申しました。すると弟はまっ青さおな顔の、両方の頬ほおからあごへかけて血に染まつたのをあげて、わたくしを見ましたが、物を言うことができませぬ。息をいたすたびに、傷口でひゅうひゅうという音がいたすだけでございませう。わたくしにはどうも様子がわかりませぬので、『どうしたのだい、血を吐いたのかい』と言って、そばへ寄ろうといたすと、弟は右の手を床とこに突いて、少しからだを起こしました。左の手はしっかりあごの下の所を押えています、その指の間から黒血の固まりがはみ出しています。弟は目でわたくしのそばへ寄るのを留めるようにして口をききました。ようよう物が言えるようになったのでございませう。『すまない。どうぞ堪忍してくれ。どうぞせなおりそうにもない病気だから、

早く死んで少しでも兄きにらくがさせたいと思ったのだ。笛ふえを切ったら、すぐ死ぬるだろうと思つたが息がそこから漏れるだけで死ぬない。深く深くと思つて、力いっぱい押し込むと、横へすべつてしまった。刃はこぼれはしなかつたようだ。これをうまく抜いてくれたらおれは死ぬるだろうと思つている。物を言うのがせつなくなつていけない。どうぞ手を借して抜いてくれ』と言うのでございます。弟が左の手をゆるめるとそこからまた息が漏ります。わたくしはなんと言おうにも、声が出ませんので、黙つて弟の喉のどの傷をのぞいて見ますと、なんでも右の手に剃かみそり刀を持って、横に笛を切つたが、それでは死に切れなかつたので、そのまま剃刀を、えぐるように深く突つ込んだものと見えます。柄えがやつと二寸ばかり傷口から出ています。わたくしはそれだけの事を見て、どうしようという思案もつかずに、弟の顔を見ました。弟はじつとわたくしを見詰めています。わたくしはやつとの事で、『待つていてくれ、お医者を呼んで来るから』と申しました。弟は恨めしそうな目つきをいたしました。また左の手で喉のどをしっかりと押えて、『医者がなんになる、あゝ苦しい、早く抜いてくれ、頼む』と言うのでございます。わたくしは途方に暮れたような心持ちになつて、ただ弟の顔ばかり見ております。こんな時は、不思議なもので、目が物を言います。弟の目は『早くしろ、早くしろ』と言つて、さも恨めしそうにわたくしを見

ています。わたくしの頭の中では、なんだかこう車の輪のような物がぐるぐる回っているようでございましたが、弟の目は恐ろしい催促をやめません。それにその目の恨めしそうなのがだんだん険しくなつて来て、とうとう敵かたきの顔をでもにらむような、憎々しい目になつてしまいます。それを見ていて、わたくしはどうとう、これは弟の言つたとおりにしてやらなくてはならないと思ひました。わたくしは『しかたがない、抜いてやるぞ』と申しました。すると弟の目の色がからりと変わつて、晴れやかに、さもうれしそうになりました。わたくしはなんでもひと思ひにしなくてはと思つてひぎを撞つくようにしてからだを前へ乗り出しました。弟は突いていた右の手を放して、今まで喉を押えていた手のひじを床とこに突いて、横になりました。わたくしは剃かみそり刀の柄をしっかりと握つて、ずっと引きましました。この時わたくしの内から締めておいた表口の戸をあけて、近所のばあさんがはいつて来ました。留守の間、弟に薬を飲ませたり何かしてくるようになり、わたくしの頼んでおいたばあさんなのでございます。もうだいぶ内のなかが暗くなつていましたから、わたくしにはばあさんがどれだけの事を見たのかわかりませんでした。ばあさんはあつと言つたとき、表口をあけ放しにしておいて駆け出してしまいました。わたくしは剃かみそり刀を抜く時、手早く抜こう、まっすぐに抜こうというだけの用心はいたしましたが、どうも抜いた時の

手ごたえは、今まで切れていなかった所を切ったように思われました。刃が外のほうへ向いていましたから、外のほうが切れたのでございましょう。わたくしは剃刀を握ったまま、ばあさんのはいつて来てまた駆け出して行つたのを、ぼんやりして見ておりました。ばあさんが行つてしまつてから、気がついて弟を見ますと、弟はもう息が切れておりました。傷口からはたいそうな血が出ておりました。それからとしよりしゅう年寄衆がおいでになつて、役場へ連れてゆかれますまで、わたくしは剃刀をそばに置いて、目を半分あいたまま死んでいゝる弟の顔を見詰めていたのでございます。」

少しうつ向きかげんになつて庄兵衛の顔を下から見上げて話していた喜助は、こう言つてしまつて視線をひぎの上に落とした。

喜助の話はよく条理が立つている。ほとんど条理が立ち過ぎていると言つてもいいくらいである。これは半年ほどの間、当時の事を幾たびも思い浮かべてみたのと、役場で問われ、まちぶぎようしよ町奉行所で調べられるそのたびごとに、注意に注意を加えてさらつてみさせられたののためである。

庄兵衛はその場の様子を目のあたり見るような思いをして聞いていたが、これがはたして弟殺しというものだろうか、人殺しというものだろうかという疑いが、話を半分聞いた

時から起こつて来て、聞いてしまつても、その疑いを解くことができなかつた。弟は剃かみそ刀りを抜いてくれたら死なれるだろうから、抜いてくれと言つた。それを抜いてやつて死なせたのだ、殺したのだとは言われる。しかしそのままにしておいても、どうせ死ななくてはならぬ弟であつたらしい。それが早く死にたいと言つたのは、苦しさに耐えなかつたからである。喜助はその苦くを見ているに忍びなかつた。苦から救つてやろうと思つて命を絶つた。それが罪であろうか。殺したのは罪に相違ない。しかしそれが苦から救うためであつたと思うと、そこに疑いが生じて、どうしても解けぬのである。

庄兵衛の心の中には、いろいろな考えてみた末に、自分よりも上のものの判断に任すほかないという念、オオトリテエに従うほかないという念が生じた。庄兵衛はお奉ぶぎょう行様の判断を、そのまま自分の判断にしようと思つたのである。そうは思つても、庄兵衛はまだどこやらにふに落ちぬものが残つているので、なんだかお奉行様に聞いてみたくてならなかつた。

次第にふけてゆくおぼろ夜に、沈黙の人二人ふたりを載せた高瀬舟は、黒い水の面おもてをすべつて行つた。

青空文庫情報

底本：「山椒大夫・高瀬舟」岩波文庫

1938（昭和13）年7月1日第1刷発行

1967（昭和42）年6月16日第34刷改版発行

1998（平成10）年4月6日第77刷発行

初出：「中央公論 第31年第1号」

1916（大正5）年1月1日発行

入力：kompass

校正：土屋隆

2006年3月8日作成

2011年4月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

高瀬舟

森鷗外

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>